

シンポジウム／鬼と山人―『津軽口碑集』を基点として―

## 遍歴する医師・内田邦彦

―『津軽口碑集』・内田家資料・「医者」の民俗学―

### 飯倉 義之

#### 一 内田邦彦とは何者か

内田邦彦の名を、民俗学に携わる者はどこかで目にしてはるはずだ。医業の傍ら行なった民俗採集をまとめた『南総の俚俗』『津軽口碑集』は、柳田國男や南方熊楠が度々引用している。両書は角川書店『日本民俗誌大系』（以下『大系』）の関東と東北の巻に収録されている。同集中、専業の民俗学徒でなくして複数巻に在する人物は、他にない。にもかかわらず内田は近年まで謎の人物であった。

二〇〇五年に青森県史編さん委員会民俗部会と飯倉照平氏が行なった内田家への訪問調査で、家人への聴き取りや遺稿の検討がなされ、その人となりや方法が少しずつ明かされようとしている。本稿では飯倉氏・佐々木達司氏と、内田邦彦の孫に当たられる仲村美彦・みゆきご夫妻の先行研究『飯倉二〇〇〇、佐々木二〇〇六、二〇〇七、内田・仲村二〇〇七』に導かれつつ、内田邦彦という特異な民俗研究者について概説したい。

まずは内田邦彦の経歴について整理しよう。内田は一八八一年、千葉県長柄郡二宮本郷村（現、茂原市）真名の医家、通称「マンナのイシャドン」の家に生まれる。県立千葉中学校から金沢の第四高等学校を経て、京都帝国大学福岡医学校に進学。『大系』略歴には早くより柳田國男に私淑、大学時代に俚俗の採集を始めたとある。文学を志すと主張し、実家と採めたこともあつたらしい。曲折の末、福岡で医師免許を取得、一九一二年に帰郷し開業する。当時は父親も開業中であり、「若先生」として自由な時間が取れた内田は往診の傍ら土器・石器の発掘や民俗採集をなし、一九一五年に『南総の俚俗』を刊行する。

同集の好評価を受け、内田の活動は精力的になる。一九一九年、マレーに渡航。この渡航の詳細は不明だが、白衣を着て診療所らしき場所で撮った内田の絵葉書が残されている。同年末か翌二〇年の年頭に、津軽五所川原へ単身移住。医業の傍ら民俗採集を行なう。この資料がのちに『津軽口碑集』としてまとめられる。同年六月、アイヌ調査を志して樺太へ出発。帰路、海馬島近くで乗船箱崎丸が座礁、『津軽口碑集』草稿以外の調査資料を失う。当時の新聞記事によると死者一名行方不明者一名、貨物の全てを失う大惨事であった。内田はこのとき積年の手稿・記録を失ったと書いている。マラッカや樺太の記録は北海の波に消えた。

五所川原で追採集を行ない帰郷。一九二九年に『津軽口碑集』（郷土研究社）を刊行。柳田との交流はこの頃より始まったらしい。父から医院を受け継いだ内田は以後遠出することはなかったが、

往診先や近隣での採集・発掘は弛むことなく続けた。また戦後には万葉集の国語学的研究にも意欲を燃やした。一九六五年、茂原市文化功労賞受賞。一九六七年二月二十八日、没。享年八五歳。

同時代にここまでの移動をして民俗採集を行なった研究者は他にない。ましてや内田は医業という本業を持つての所作である。この内田の特異な方法を、『口碑集』と、内田家に遺された資料から探っていく。

## 二 内田家資料と『津軽口碑集』の方法

二〇〇五年の訪問により、内田邦彦の遺稿の全貌が明らかになった。この仲村家蔵資料は、「佐々木二〇〇六」に做って「内田家資料」と称する。

一方の『津軽口碑集』（以下『口碑集』）は総頁数二三四頁、「序」「凡例／地名解／人物略伝」「童話伝説」「俚諺」「雑事」「童戯」「歌謡」「年中行事」の各部から成る。この両資料から、内田の民俗採集における方法の特徴を二点指摘する。

まず一点は、〈ことば〉に対する感受性である。『口碑集』は全体に、「雑事」に多少のスケッチは挟まれるものの、居留者ももつとも採集しやすいはずの物質文化の記述が少ない。「童話伝説」に口承文芸資料を、「俚諺」には言い回し・俗信を収め、「雑事」には信仰・儀礼など民俗事象、食物・鳥・茸の名称と利用法、そして「津軽ことば」の分析を配している。「童話伝説」の掲載話は多くが文語文だが、数話で方言の語りの再現が試み

られ、「俚諺」では諺・言い回しを用いて村内の逸話や人物評価の基準といった意識までも記述しようと試みている。内田家資料に残る『南総雑事』が俚諺・俗信の集成であり、また晩年に万葉集の国語学的研究を志していることからわかるように、内田はあくまでも〈ことば〉の採集者であった。その精髓として「俚諺」があり、修飾された〈ことば〉として「童話伝説」がある。「雑事」はその〈ことば〉を直截に収録した部である。そして内田の興味は〈ことば〉そのものよりも、〈ことば〉によってのみ表象されるような心意の領域にあった。内田のいう「口碑」や「俚俗」は「口承文芸」の同義語ではなく、そうした〈ことば〉のありようの総体を指す語であるはずだ。

もう一点は、話者のデータが当時としては詳細に提示されていることである。『口碑集』巻頭の「地名解」では、字ごとの話者数を男女別に識字能力の有無を注記して挙げ、続く「人物略伝」では主要な六人を挙げて謝意を表しているが、そこでは生年・生地その他に「問われれば滞りなく答う」「故事に通じ、漁に堪能」といったパーソナルデータや、「元は漁夫とぞ」といった生活歴の提示がなされる。これは現在では当然とも思える話者へのまなざしであるが、同時代を見渡したとき、このようなまなざしを話者に向けていた研究者はいなかった。当時の郡や旧国を単位として進められていた昔話研究が話者に向けていた、〈伝承の容れ物〉とも言いえる伝承者観とは明らかに異なる。

こうした話者への注目、内田家資料にも色濃く表れる。内

田家資料では話者各人を略号で整理して資料に重ね、その（こ  
とば）を誰が知り誰が使うのかの分析を試みている。それは平  
坦な「地域」ではなく、「話者」の一人ひとりを通して、南総  
における諺・俗信のありようを把握する試みであるだろう。

### 三 「医者」の民俗学」という一つの回路

以上のように内田邦彦の手つきやまなざしは独自のもので  
あった。その独自性は、内田の生業である「医学」から発する  
ところが大きいと考える。内田が箱崎丸の事故で失ったとする  
積年の手稿のうちに「脚気凶録」の名が見える。内田にとって  
民俗採集は、医業と並行して行なわれるべきいとなみであった。

内田が津軽五所川原を採集地に選んだのは、二つの理由があ  
る。一つは五所川原には一九一八年に鉄道が敷設され、鉄道の  
本州最北端となっていたこと。もう一つは、五所川原に勤務医  
として在籍しうる何らかのつてが存在したらしいことにある。  
佐々木達司氏は、五所川原の「増田医院」の当時の院長・増田  
貢は千葉医大に学び、一八八二年生と内田と歳も近いため、県  
医師会などを通じて内田がなんらかの働きかけを行なった可能  
性も考えられると指摘された。<sup>(3)</sup>

柳田が「郵便」や「雑誌」という近代のネットワークを用い  
て民間伝承の学を組織しようとしていたとき、内田も「病院」  
や「鉄道」といった近代のネットワークを用いて（ことば）と  
民俗の採集を試みていた。

また内田の特徴である、話者個別の生活歴や転居歴の詳細な  
データ化は、医師のカルテの方法とも通底する。そして内田が  
千葉・マレー・津軽・樺太と遍歴して民俗採集を行ない得た根  
底には、医学という近代の技術に対する自信と、国や地域が変  
わろうとも人間存在の生物学的基礎は不変であるという医学者  
の確信があったはずだ。

内田のこのようないとなみをふまえて、「医者」の民俗学」と  
も名づくべき態度について触れて、まとめたい。

地方在住の医師にはしばしば趣味的に郷土史を嗜む人が見ら  
れる。地方在住の民俗学研究者にも、医師を生業とした人は多  
い。柳田が岩手日報の談話「柳田一九五三」で軽口するように、  
医者は名士で教養と金と暇があるからだ、といわれればそれま  
での話だが、それでも「なぜそこで民俗学なのか」という疑問  
は埋まらない。

医者が民俗学を志すのは、それが医師の日常のいとなみと親  
和性を持つからと考える。医師の診察室における触診・問診と  
いうみぶりを、プライベートな身体・生活、ライフ・ヒストリー  
にまで分け入るパーソナル・インタビュと読み替えると、民  
俗学との共通性が明らかとなる。そのような回路から、医者が  
「郷土」や「人間」に興味を持って世界を見渡したとき、その  
道具立てとして「民俗学」が発見される。「人はなぜ民俗学を  
志すのか」という問いを立てたとき、その入り口の一つにこう  
した「医者」の民俗学」が想定できる。<sup>(4)</sup>

それで何だ、単にトリビアではないのか、という意見も出るかもしれない。しかしこれは決して些末な知識などではない。報告者がどのような入り口から、何を目的として「民俗学」という道具立てを選択したかが明らかとなることで、資料批判がより意味を持つてくる。そしてこの問いは、民俗学には何ができるか、何が求められていたのかという、民俗学の可能性を模索する問いでもあるはずだ。

学史は常にいま・ここ、そしてこれからを拓いてゆくに書かれるべきである。その意味で内田邦彦の示唆する可能性は、大きい。

## 注

- (1) 仲村みゆき氏にご教示いただいた『樺太日日新聞』による。
- (2) 内田家資料の判読は現在、仲村ご夫妻のご協力の下、飯倉照平氏の協力を得て論者が試みている。同資料はおおよそ以下の通り。
  - ①『南総雑事・俚諺』草稿／②『南総雑事・俚諺補遺』草稿／③『南総雑事』草稿／④『総南口碑集』草稿／⑤『青楓雑記帳』草稿／⑥『万葉集研究草稿』／⑦『歌集草稿』うち⑤の一部は「内田・仲村二〇〇七」として活字化された。
- (3) 佐々木達司氏のご教示及び「佐々木二〇〇七」による。
- (4) 近年ではこのタイプの「医者民俗学」者として、佐賀純一を挙げうる。佐賀は地域医としてのまなざしから土浦近辺を叙述し「佐賀一九九二・一九九三」、また診察・

往診というとなみから、患者である元博徒の老人より長大でごくプライベートなライフ・ヒストリーの聴き取りを行ない得ている「佐賀一九八九」。

## 参考文献

- 内田邦彦 一九一五 『南総の俚俗』 桜雪書屋（『日本民俗誌大系』八 角川書店 一九七五所収）
- 内田邦彦 一九二九 『津軽口碑集』 郷土研究社（『日本民俗誌大系』九 角川書店 一九七四所収）
- 内田邦彦「著」・仲村美彦「編」二〇〇七 『長生の梵鐘と鑄工』 崙書房出版
- 飯倉照平 二〇〇〇 「内田邦彦「南総の俚俗」について」大網白里町郷土史研究会『忘れえぬかも』一 号
- 佐賀純一 一九八九 『浅草博徒一代』 筑摩書房
- 佐賀純一 一九九二 『ちじらんかんぶん』 図書出版社
- 佐賀純一 一九九三 『田舎町の肖像』 図書出版社
- 佐々木達司 二〇〇六 「内田邦彦著『津軽口碑集』―その背景と著者補訂・正誤表―」『青森県の民俗』六 青森県民俗の会
- 佐々木達司 二〇〇七 「内田邦彦著『津軽口碑集』―箱崎丸遭難前後の事情―」『青森県の民俗』七 青森県民俗の会
- 柳田國男 一九五三 「民俗学と岩手⑥」（『柳田國男全集』三三二 筑摩書房 二〇〇四所収）
- （いいくら・よしゆき／國學院大學大学院特別研究生）